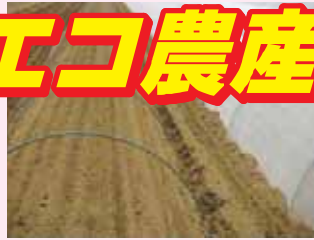




**平成18年度**

**「ちばエコ農産物」栽培事例集**



千葉県農林水産部

平成19年3月



## あ い さ つ

千葉県では、化学合成農薬と化学肥料を慣行栽培の半分以下に減らした「ちばエコ農産物」の認証制度を平成14年度に創設し、農業の自然環境への負荷を減らし、生産者と消費者のお互いの顔が見える農業を実現し、消費者の求める安全・安心な農作物を供給する体制をつくるために「ちばエコ農業」を推進してまいりました。

本認証制度は開始から5年を経過し、生産者の方々のたゆみない努力と積極的な取組みにより、栽培面積は着実に増えてまいりました。

しかし、昨年5月にポジティブリスト制度が導入されて以来、生産履歴がはっきり確認できる「ちばエコ農産物」を求める実需者からの要請の高まりや、消費者の農産物に対する安心・安全への関心も高まりつつあり、需要に生産が追いつかないのが現状です。

このような中、県では、栽培面積拡大のスピードアップを図るため、生産者の方が、新たに「ちばエコ農産物」の栽培に取り組もうとする際、直接役立つ資料としてこれまでの成功事例を集めた栽培事例集を発行いたしました。

生産者の皆様には、本資料を参考とされ「ちばエコ農産物」の栽培に取り組まれることを願うとともに、各指導機関・団体の方々にも指導の際の参考資料としてご活用いただくよう願います。

平成19年3月

千葉県農林水産部長 川 島 彰比古



# 目 次

## 1 部長あいさつ

## 2 「ちばエコ農産物」栽培事例

- (1) こまつな・冬どり（千葉農林振興センター）…………… 2
- (2) えだまめ・トンネル（東葛飾農林振興センター）…………… 6
- (3) 日本なし（印旛農林振興センター）…………… 10
- (4) 水稻（ちば28号（愛称：ふさこがね））（香取農林振興センター）… 14
- (5) 非結球レタス（リーフレタス）・冬どり（品種：ハワイ2号）  
（海匠農林振興センター）…………… 18
- (6) 水稻（ちば28号（愛称：ふさこがね））（山武農林振興センター）… 22
- (7) たまねぎ・マルチ（品種：ソニック）（長生農林振興センター）… 26
- (8) 日本なし（夷隅農林振興センター）…………… 30
- (9) エンダイブ・秋冬どり（品種：フランス）  
（安房農林振興センター）…………… 34
- (10) ほうれんそう・夏どり（品種：ジョーカー）  
（君津農林振興センター）…………… 38

## 3 資 料

- (1) 「ちばエコ農業」化学合成農薬及び化学肥料の使用基準（上限）… 42
- (2) 「ちばエコ農業」化学合成農薬に含めない農薬…………… 46



# 「ちばエコ農産物」栽培事例

※本書に記載した農薬使用は、栽培事例時点のもので  
す。実際の栽培に際しては、ラベルの表示をよく確  
認し、最新の農薬使用基準を守って使用してください。

# こまつな・冬どり

千葉農林振興センター

## 1 地区名（集団名）

千葉市東部地区（J A千葉みらい千葉東部地区出荷組合連合会）

## 2 栽培戸数、面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

- (1) 栽培戸数 11名
- (2) 面積 545 a
- (3) 収穫量又は出荷量 12,000ケース（300g×30束）
- (4) 出荷先又は販売方法 市場出荷

## 3 ちばエコ基準達成状況

区 分	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬(成分回数)	1回	3回
化学肥料（窒素分量）	3～8.5kg/10a	8.5kg/10a

## 4 事例のあらまし

千葉市南東部地区は、にんじん、だいこん、ねぎ、ごぼう、さといもなど露地野菜の産地で、93名の生産者がJ A千葉みらい東部地区出荷組合連合会を組織しています。この中で12名が薬物部会を組織し「こまつな」の周年出荷を行っています。

当産地は、以前から減農薬栽培を行っており、平成16年より「冬どりこまつな」、平成17年より「秋・冬どりこまつな」で「ちばエコ農業産地」指定を受けました。現在では全面積（全栽培者数）の8割以上がちばエコ栽培に取り組んでいます。ちばエコ農産物の認証を受けたコマツナは、学校給食にも供給されており、食育活動にも一役買っています。

## 5 背景・動機

千葉市南東部地域は、露地野菜を中心としJ A千葉みらい千葉東部地区出荷組合連合会が組織され、露地野菜の産地として活動をしてきました。しかし、農産物の価格低迷や地力の低下が問題となり始め、産地の活性化に向けて新たな取り組みが必要となってきました。一方、地域の消費者との交流の中で、安全で安心な地元の農産物への要求がとて高いことがわかってきました。

このような背景により、生産者と関係機関で話し合いを重ね、減化学・減農薬栽培に取り組む、平成10年には国の「特別栽培農産物に係るガイドライン」に従って、主力品



目のにんじんとだいこんから具体的な取り組みを始めました。

平成14年には、ちばエコ農業推進事業が始まったことを受けて、にんじんとだいこんの産地指定に向けて取り組み、現在では、こまつなを含めた5品目で産地指定を受けています。

こまつなは、今から10年ほど前に、数名のメンバーが軽量のほうれんそう、こまつななどの葉物に取り組んだのをきっかけに、周年栽培が始まりました。

こまつなはアブラナ科の葉物野菜のため、一番の問題は害虫でしたが、従来よりワリフや防虫ネットにより、農薬の削減に取り組んできており、ちばエコ農産物の導入は比較的容易でした。



## 6 栽培方法

### (1) 土づくり

連作を避けるため、1戸あたり1～1.5haの畑を区分し順番に使います。区分した畑では2～3作栽培します。柔らかく肥沃な土を作るために、輪作体系に緑肥（ヘイオーツ、ソルゴーなど）を取り入れて畑にすき込みます。また、牛糞等の堆肥を1～2 t/10 a施用します。現在、地域内の酪農家の牛糞堆肥の使用も進んでいます。

### (2) 播 種

条間15cmの6～8条播きにします。株間5cm（冬は3cm）になるように、種の大きさにあわせて播種機（ごんべい）のベルト等を調節します。8条播き50mのトンネル一本で300～400束収穫できるので、1日で束ねられる数を生育日数から計算して、1日当りの播種の面積を決めます。

### (3) 病虫害防除

防虫ネットによる被覆が普及しています。虫だけでなく大風や大雨の被害軽減にも有効です。支柱を1～1.5mおきに立て、ワリフやサンサンネット（目合0.8mm）で被覆します。裾は土の中に埋めて、虫の侵入を防ぎます。栽培期間中にトンネル内で虫が発生していれば、ネットの上から薬剤散布をします。冬は防虫ネットの上

にユーラック等をかけて保温します。厳冬期にはパスライト等のべたがけもします。ハウスや大型トンネルも使い、年間を通じて出荷します。

#### (4) 収 穫

収穫直前まで防虫ネットは覆っておきます。収穫調製は畑で行い、1束400gの束にして紫のテープで結束します。1日で1人150～300束作ることができます。収穫したコマツナは洗い機で根を洗って泥を落とし、予冷库にいれます。水が切れたら20束を1箱に詰めて出荷します。

#### ア 栽培管理（平成17年度の事例）

作 業 名	実 施 年 月 日
前作収穫終了	平成17年 9月15日
耕 起	9月30日
施 肥	10月12日
播 種	10月13日～28日
収 穫 開 始	12月 1日
収 穫 終 了	12月25日

#### イ 使用資材

##### (ア) 土づくり・施肥等

(10 a 当たり)

使用銘柄 (N:P:K)	実 施 年 月 日	施用量	全 N	化学N
牛 糞	平成17年 9月30日	1.2 t		
米 糠	9月30日	350kg	7.0kg	
ジシアン有機特806号	10月12日	80kg	6.4kg	4.4kg
苦土石灰	10月12日	60kg		
合 計			13.4kg	4.4kg

※米糠はN成分2%で計算した

##### (イ) 病虫害・雑草防除等

使 用 農 薬	対 象 病 害 虫	実 施 年 月 日
ダイアジノン粒剤5	キスジノミハムシ	10月13日～28日(播種時)
※スピノエース顆粒水和剤	コナガ・アオムシ類	10月28日及び11月7日
化学合成農薬使用回数1回（総使用回数2回）		

※印は、「化学合成農薬に含めない農薬」

## 7 今後の展望等

薬物部会はすでに市場評価も高く、高い技術をもっていますが、さらなる技術向上を全員で目指します

(1) 周年出荷の安定化

こまつなの生産は天候に左右され、反収は年次格差が大きいのが実態です。特に、梅雨～夏場、厳寒期の出荷量の安定が課題です。栽培講習会や現地検討会による情報交換などさらなる研鑽を怠らず技術向上に努めます。

(2) 品種の選定

品種については常に試作を行い、ちばエコ栽培に適し、病害虫に強く消費者や実需者のニーズに合う品種を選定します。また、栽培する季節にあった品種を選定することも大事です。

(3) 土づくりの推進

輪作や緑肥のすき込み、堆肥施用による土づくりが行われていますが、土づくりにはさらに力を入れて取り組みます。

(4) コスト・労力の低減

ちばエコ農業に取り組んでも、販売面においては一般栽培との価格差は出ておらず、労力的にも余分にかかっているのが実情です。低コスト化、省力化を目指します。また、有利販売に向けた取り組みも展開します。

(5) 市場評価の維持・向上

特に品質が低下しやすい梅雨期～夏場、厳寒期の安定した生産に力を入れ、安心・安全で高品質なちばエコ農産物を、安定的、計画的に出荷し、市場評価を高めます。

(6) 外部へのPR

消費者や流通業者との交流や学校給食での活用を通じて、ちばエコ農産物や産地の取り組みを積極的にPRします。

今後、この部会の取り組みが他地域の生産者にも波及し、より多くの消費者にちばエコ農産物が供給されることが期待されます。

# えだまめ・トンネル

東葛飾農林振興センター

## 1 地区名（集団名）

野田市（J Aちば県北旭出荷組合）

## 2 栽培戸数、面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

(1) 栽培戸数 16戸

(2) 栽培面積 310.5 a

(3) 収穫量又は出荷量 19 t

(4) 出荷先又は販売方法

卸売市場（東京青果、浦和中央青果）を通じ、都内及び市場周辺の量販店へ販売

## 3 ちばエコ基準達成状況

区 分	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬(成分回数)	3回	3回
化学肥料（窒素分量）	1.44kg/10 a	2.5kg/10 a

## 4 事例のあらまし

野田市は、えだまめの栽培面積235ha、出荷量2,000 tであり、全国有数の産地となっています。

こうした中、J Aちば県北旭出荷組合では、市内でも最も早くエコファーマーを組合員全員で取得し、環境にやさしい農業に取り組んできました。更に一步進め、生産履歴の開示による安全・安心農産物の生産を目指し、平成17年度に「ちばエコスピードアップ事業」による栽培方法の検証を行い、「ちばエコ農業産地」の指定を受け、平成18年度から「ちばエコ農産物」の栽培に取り組んでいます。

なお、栽培は「統一栽培暦」に基づくとともに、堆肥の投入を主体とした土づくりを組み入れるなど持続的な農業を実践しています。

## 5 背景・動機

野田市のえだまめ栽培は、昭和20年代の後半から、自家用味噌づくりのための大豆栽培からの転換で始まりました。その後、えだまめ用の品種を取り入れ最初に栽培を開始したのは、このJ Aちば県北旭出荷組合の前身の組合であり、その後、市内全体へえだまめ栽培は広がりました。近年、転作作物の一つとして地方在来のえだまめ品種が導入され、全国的に生産量は増加傾向にありますが、面積235ha、出荷量2,000tを誇る野田市

のえだまめは、全国有数の産地となっています。

市内の主要なえだまめ生産組織の一つである、JAちば県北旭出荷組合は、市内でもいち早く「ちばエコ農業産地」の指定を受け、平成18年度より「ちばエコ農産物」の栽培に取り組みました。このきっかけは、組合員全員の合意でのエコファーマーの取得による環境にやさしい農業の実践と、出荷形態を束から袋へ、出荷市場を東北から東京へ変更し、積極的に販売に取り組む意欲が強かったことです。

このため、出荷組合の役員、農協や全農千葉県本部等の関係機関で協議検討を重ね、えだまめ産地として更に先進的な取り組みとして、自然環境にもやさしい安全・安心農産物生産・販売を行うこと、栽培履歴を記帳し開示することを目指し、JAグループ千葉の「もっと安心農産物」と併せて「ちばエコ農業」に取り組むこととしました。さらに、「ちばエコ農産物」の認証とともに、ブランド化を目指し「なつみ（夏味）」の愛称で販売を開始しています。



ちばエコ生産ほ場には  
「生産ほ場表示板」を掲示

JAちば県北旭出荷組合の  
皆さんが生産する  
枝豆「なつみ（夏味）」ブランド



## 6 栽培方法

### (1) 土づくり

せん定枝や刈草を原料とし、野田市堆肥センターで製造される完熟堆肥を施用しています。また、えだまめは窒素分に敏感なため、堆肥は前作物の栽培時に施用しています。

### (2) 肥料

肥料は、従来からの落花生化成に替え、有機配合肥料を使用し、化学肥料の施用量をちばエコ基準以下に抑えています。

### (3) 被覆栽培

病害虫の被害軽減と早期出荷のため、トンネル・マルチ栽培を行っています。また、後半の7月出荷については、雑草対策としてグリーンマルチ栽培を導入し、化学合成農薬の使用量をちばエコ基準以下に抑えています。

## ア 栽培管理

作業名	実施年月日
前作(ほうれんそう)収穫終了	平成17年11月30日
播種	平成18年3月上旬～4月上旬
耕起・施肥	3月中旬～4月中旬(定植5日前)
定植	3月中旬～4月下旬(は種後15～20日)
病害虫防除	3月下旬～(定植後)
収穫開始	5月下旬
収穫終了	6月下旬

## イ 使用資材

### (ア) 土づくり・施肥等

(10a 当たり)

使用銘柄 (N:P:K)	実施年月日	施用量	全 N	化学N
完熟堆肥(剪定枝等)	前作作付前	1～2 t		
枝豆くん505 (5:10:5)	作付前	120kg以下	6.0kg	1.44kg
苦土重焼りん	作付前	60kg		
合 計			6.0kg	1.44kg

### (イ) 病害虫・雑草防除等

使用農薬	対象病害虫	実施年月日	
①スミチオン乳剤	カメムシ類、マメシクイガ	収穫21日前まで	①～④ のうち から3 剤以内
②トレボン乳剤	カメムシ類、マメシクイガ	収穫21日前まで	
③アグロスリン乳剤	カメムシ類、マメシクイガ	収穫7日前まで	
④アフーム乳剤	ハスモンヨトウ	収穫3日前まで	

(統一栽培暦より)

## 7 今後の展望等

野田市役所では、市内農業者の環境にやさしい農業の取組を支援するため、堆肥センターを設置し、剪定枝や刈草を原料とした堆肥を提供しています。また、市の方針として「ちばエコ農業」への取組みや「エコファーマー」の取得を積極的に推進しています。この結果、新たに1つの生産組織が「ちばエコ農業産地」の指定を受け、平成19年度から「ちばエコ農産物」（JAグループ千葉の「もっと安心農産物」）の生産に取り組むこととなりました。

市内にえだまめ栽培が広がった時と同様、えだまめ栽培発祥の地のJAちば県北旭出荷組合の取組みを基点として、市内各生産組織に波及することが期待されます。

# 日 本 な し

印旛農林振興センター

## 1 地区名（集団名）

白井・印西地区（21世紀梨作り研究会）

## 2 栽培戸数、面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

- (1) 栽培戸数 3戸
- (2) 栽培面積 75a
- (3) 収穫量又は出荷量 15t
- (4) 出荷先又は販売方法 直売等

## 3 ちばエコ基準達成状況

区 分（U園）	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬(成分回数)	19～23回	26回
化学肥料（窒素分量）	4.2～9.1kg/10a	13kg/10a

## 4 事例のあらまし

印旛郡北西地域を中心に、若手を主体とした「21世紀梨作り研究会」が組織されています。現在、印旛地域では、この組織が中心となり、日本なしの減農薬に取り組んでいます。

21世紀梨作り研究会は、会員数37名で、減農薬化に向けた試験や調査を中心に、研究活動や学習活動を実施しています。平成17年度は、その中から3名が「ちばエコ農産物」認証を取得することができました。

## 5 背景・動機

農薬に対する世間の反応が機敏になってきたことや、薬剤散布自体が近隣住民とのトラブルの原因となりやすいこともあり、以前より減農薬化を目指す生産者は少なくありませんでした。しかし、年1作であり失敗がきかない、病害虫が多く技術的にも難しいなどの問題があり、なかなか取り組みを始められない現状がありました。

「21世紀梨作り研究会」は、なし栽培の先進技術等の研修を中心に行っていましたが、平成12年度より、減農薬化を目指した試験、調査や研修なども実施するようになりました。

減農薬化に取り組むにあたっては、「ちばエコ農産物」認証を取得し、有利販売などを目指すのではなく、薬剤散布の労力軽減、散布する自分自身の健康、薬剤コストの低減ができる事を重点に考えました。



そして、それを実現することにより、消費者や市場などから言われてやるのではなく、自ら自分たちのためにといった、能動的な姿勢で取り組み、その結果、消費者に喜ばれるなしが生産できることを目標に取り組んでいます。



研修会風景



牧草利用  
(ケンタッキーブルーグラス・  
株元はナギナタガヤ)

## 6 栽培方法

日本なしの「ちばエコ農産物」認証では、防除技術が一番課題となるため、防除技術の確立に向けた工夫や努力がポイントになります。

まず、防除技術についての工夫を述べますと、

- ① 園地の徹底観察による、病虫害発生状況の把握
- ② 防除記録の徹底とその結果分析
- ③ 病虫害の特徴の把握
- ④ 農薬の性質や効果の把握
- ⑤ 園地の環境整備を重視→草生栽培のマスター

等の栽培に対する姿勢をもとに栽培を行い、

- ① 天候を考慮した防除タイミングの選定
- ② 病虫害毎の適期防除
- ③ 害虫の発生調査
- ④ 土着天敵利用による総合防除の実践

などを行なう必要があります。

ア 栽培管理

作業名	実施年月日
前作収穫終了	平成16年9月30日
受粉	平成17年4月20日
摘果	5月1日
収穫開始	8月5日
収穫終了	10月10日

イ 使用資材

(ア) 土づくり・施肥等

(10aあたり)

使用銘柄 (N:P:K)	実施年月日	施用量	全 N	化学N
堆肥	平成16年12月15日	2 t		
スーパー有機100 (6:6:0)	12月15日	160kg	9.6kg	
カニガラ (5:3:0)	12月15日	80kg	4.0kg	
魚骨 (4:9:0)	12月15日	80kg	3.2kg	
コツリン40 (0:40:0)	平成17年3月10日	40kg		
エージングE (4.5:5:3)	3月29日	40kg	1.8kg	
くみあい硫黄 (21:0:0)	9月	20kg	4.2kg	4.2kg
合 計			22.8kg	4.2kg

(イ) 病虫害・雑草防除等

使用農薬	対象病虫害	実施年月日
トップジンMペースト	胴枯病	剪定期間中
※石灰硫黄合剤 (1部)	黒星病、カイガラムシ類	平成17年3月13日
インダーフロアブル	黒星病、赤星病	4月14日
サニパー	黒星病、赤星病	4月14日
※デルフィン顆粒水和剤	ケムシ類	4月14日
※バンガードKS-20	展着剤	4月14日
スコア水和剤10	黒星病、赤星病	4月30日
トップジンM水和剤	黒星病	4月30日
バリアード顆粒水和剤	アブラムシ類	4月30日
ベルコートフロアブル	黒星病、輪紋病	5月10日
※デルフィン顆粒水和剤	ケムシ類	5月10日
キノンドーフロアブル	黒星病、輪紋病	5月17日
フロンサイドフロアブル	黒星病	5月29日
モスピラン水溶剤	アブラムシ類、クワコナカイガラムシ類	6月2日

使 用 農 薬	対 象 病 害 虫	実施年月日
※コンフューザーN	ナシヒメシンクイ、チャノコカクモンハマキ	平成17年6月8日
ユニックス顆粒水和剤47	黒星病	6月9日
ストロビードライフフロアブル	黒星病、輪紋病	6月19日
トップジンM水和剤	黒星病	6月19日
アンビルフロアブル	黒星病、輪紋病	7月1日
ベルコートフロアブル	黒星病、輪紋病	7月1日
ストロビードライフフロアブル	黒星病、輪紋病	7月13日
トップジンM水和剤	黒星病	7月13日
ラービン水和剤75	シンクイムシ類	7月18日
ロディー水和剤	シンクイムシ類・ハマキムシ類・ハダニ類	8月10日 9月9日
オーソサイド水和剤80	黒星病、輪紋病	10月13日
※バンガードKS-20	展着剤	10月13日

※印は、「化学合成農薬に含めない農薬」

## 7 今後の展望等

施肥面では、「ちばエコ農産物」栽培基準は有機質肥料を主体にすることで、無理なく達成できますが防除面が難しい。そこで、21世紀梨作り研究会では、減農薬化を目指し、組織的に取り組みました。

その結果、「ちばエコ農産物」認証取得の栽培者が3名誕生した他、13名の会員が減農薬化を実践しつつあり、達成次第、順次申請を行なっていく予定です。

また、この会の取り組みは、研修会を通して地域の生産者に広く影響を与えており、地域全体で日本なしの減農薬化が進みつつあります。

# 水稻（ちば28号（愛称：ふさこがね））

香取農林振興センター

## 1 地区名（集団名）

香取市白井地区（農事組合法人 清里ファーム）

## 2 栽培戸数、面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

- (1) 栽培戸数 1法人
- (2) 栽培面積 2.01ha（9筆）
- (3) 収穫量 11.94 t 600kg/10a
- (4) 出荷先 JAかとり

## 3 ちばエコ基準達成状況

区 分	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬(成分回数)	6回	7回
化学肥料（窒素分量）	4.5kg/10a	4.5kg/10a

## 4 事例のあらまし

農事組合法人「清里ファーム」は香取市白井地区（旧小見川町）に位置し、水稻、花き、露地野菜の複合経営を行っています。水稻は41haを栽培し、平成18年には県の育種品種「ちば28号（ふさこがね）」を16ha栽培しました。

そのうち2haの展示ほを設置し、種籾の温湯消毒や無人ヘリ防除地区からの除外により農薬使用回数を抑え、鶏ふん堆肥による土づくりと有機質肥料を組み合わせることで、化学肥料の使用量も削減し「ちばエコ農産物」栽培基準で栽培しました。その結果、「ふさこがね」の収量は平均585kg/10a、展示ほ分についても600kg/10a程度を確保したことで自信を深め、病害に強く倒伏しにくいちば28号（愛称：ふさこがね）は、次年度「ちばエコ農業」の認証を申請する予定です。

## 5 背景・動機

### (1) 香取地区の水稻生産

香取地区の水稻作付け面積は約1万haで、平成18年度の品種構成は「コシヒカリ」が46%、「あきたこまち」が28%、「ふさおとめ」が17%となっています。良質の早場米産地として知られ、特に旧小見川町は早生品種の作付け比率の高い地域です。

### (2) 水稻経営環境の変化

清里ファームは平成6年に法人化し、水稻を中心に規模拡大を進めると同時に花

き、露地野菜の複合経営を行ってきました。規模拡大に伴い大型機械を導入して作業の効率化を図ってきましたが、米価が低迷し、付加価値のある農産物を生産する必要が生じました。

### (3) 付加価値のある農産物の生産

清里ファームでは平成15年から鶏ふん堆肥を利用した水稻栽培、平成17年からグランドカバープランツによる畦畔管理など環境にやさしい農業に取り組んでいます。また、遠赤外線乾燥機を導入し良食味米生産に努め、付加価値のあるコメづくりをしています。



鶏ふん堆肥散布による土づくり



温湯消毒機による種籾消毒



「ちばエコ」現地検討会

## 6 栽培方法

### (1) 土づくり

前年12月に稲わらを全量すき込み、2月に鶏ふん堆肥を施用することで土づくりに努めています。

### (2) 種子予措

農薬の使用を減らすために、「湯芽工房」(タイガーカワシマ社製)を用いて、60℃の温水に10分間浸漬して種籾伝染性病害を防除しています。苗の発芽、生育は良好

であり、消毒後の廃液処理の必要もなくなります。

(3) 育 苗

種籾は4kgを28箱には種します(乾籾143g/箱)。細菌性病害の発生を防ぐために日中は換気に十分に注意し、ハウス内が極端な高温にならないようにします。

(4) 施 肥

側条施肥により施肥窒素の利用率を高め、少量の化学肥料でも初期生育を確保できるようにします。「ふさこがね」栽培に合わせて有機質肥料を36%配合した試験肥料を基肥、穂肥ともに用いました。

(5) 本田管理

植付けは60株/坪とし、代かきから田植えの期間を短くすることで雑草の発生を抑えるように努めます。また、地域では無人ヘリ防除がされますが、「ふさこがね」はいもち病に強いいため防除地区から除外しました。

ア 栽培管理

作 業 名	実 施 年 月 日
前作収穫終了	平成18年 9月20日
種 籾 消 毒	3月8日
浸 種	3月20日～
播 種	4月10日
代 か き	5月4日
田 植	5月6日
除草剤散布	5月19日
収 穫	9月5日

イ 使用資材

(ア) 土づくり・施肥等

(10aあたり)

使用銘柄 (N:P:K)	実 施 年 月 日	施用量	全 N	化学N
稲わら	平成17年12月中旬	0.5 t		
鶏ふん堆肥	平成18年2月上旬	75kg		
有機肥料(7-7-6)	5月6日	60kg	4.2kg	2.7kg
有機肥料(7-7-6)	7月7日	40kg	2.8kg	1.8kg
合 計			7.0kg	4.5kg

(イ) 病害虫・雑草防除等

使用農薬	対象病害虫	実施年月日
ダコニール1000	苗立枯病（リゾープス菌）	平成18年4月10日
オンコル粒剤5	イネミズゾウムシ、イネドロ オイムシ	5月6日
バトル粒剤	水田一年生雑草	5月19日
モゲトン粒剤	藻類	5月19日
化学合成農薬使用回数6回（総使用回数6回）		

ウ 生育と収量構成要素（品種名：ちば28号）

		ちばエコ栽培展示ほ	県目標値
幼穂形成期の生育	葉色	45.0	38～42(SPAD値)
	草丈	57.3cm	60～65cm(上限値)
	茎数	472本/m <sup>2</sup>	450～550本/m <sup>2</sup>
	茎数×葉色値	21,240	18,000～22,000
収量構成要素	穂数	400本/m <sup>2</sup>	400～450本/m <sup>2</sup>
	籾数	35,300粒/m <sup>2</sup>	31,000～33,000粒/m <sup>2</sup>
	登熟歩合	66%	85%
	玄米千粒重	24.4g	22.5～23.0g

7 今後の展望等

清里ファームは直売に積極的に取り組んでおり、10月～2月の土・日曜日に成田市内でコメや野菜を直売しています。平成18年産の水稻（コシヒカリ）と露地野菜では「ちばエコ農産物」の産地認証を取得し、エコファーマーの認証も取得するなどして、直売時にPRしています。

今後さらに消費者の支持を得て売上を拡大するために、「ちばエコ農産物」によるイメージアップを期待しています。平成18年産「ちば28号（愛称：ふさこがね）」では「ちばエコ農産物」栽培基準による栽培が実証されたため、次年度は「ちばエコ農産物」の認証を取得する予定です。

また、栽培上の課題としては、有機質肥料を用いたことにより肥効が持続して稈長が伸びすぎたので、今後、改善していく必要があります。「ちば28号（愛称：ふさこがね）」は収量性が高く組合員の評価も高かったため、販売対策にも力を入れていきます。

# 非結球レタス（リーフレタス） 冬どり（品種：ハワイ2号）

海匠農林振興センター

## 1 地区名（集団名）

旭市飯岡地区（飯岡洋菜部会）

## 2 栽培戸数、面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

- (1) 栽培戸数 55名
- (2) 栽培面積 27.6ha
- (3) 収穫量又は出荷量 537t
- (4) 出荷先又は販売方法 市場出荷

## 3 ちばエコ基準達成状況

区 分	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬(成分回数)	5回	7回
化学肥料(窒素分量)	7.5kg/10a	12.5kg/10a

## 4 事例のあらまし

旭市飯岡地区では、冬季の主力品目の一つとしてリーフレタスが生産されています。専業農家が多い当地域では農業所得も高く、多数の農業後継者がいる活気あふれた産地です。近年、消費者や実需者の食に対する安全・安心への関心が高まる中、制度創設当初の平成14年より「ちばエコ農業産地」の指定と「ちばエコ農産物」の認証を受け、栽培に取り組んでいます。栽培にあたっては統一栽培暦に基づく生産、栽培履歴の記帳の徹底とともに、堆肥の投入を中心とした土づくりや、エン麦等の地力増進作物を輪作体系に組み入れるなど持続的な農業を実践しています。

## 5 背景・動機

旭市飯岡地区は、千葉県の一部、九十九里浜の東端に位置しています。形部岬、銚子半島へと続く屏風ヶ浦と太平洋が一望でき、北は表層が関東ローム層で覆われた北総台地で、海洋性の温暖な気候と肥沃な土壌により一年を通じてメロンやキャベツ、だいこん、リーフレタス、パセリなどが栽培されている農業が盛んな地域です。

リーフレタス産地としては、平成元年にJAの品目部会制の導入により50名を超える賛同者でリーフレタス部会が発足し、JAを中心とした一元集出荷体制が整いました。消費動向をいち早くキャッチし、消費者に安全で安心、新鮮な農産物を提供することを



目的に、平成10年から環境に配慮した栽培が始まりました。堆肥投入や緑肥作物のすきこみなどによる土づくりや、化学農薬及び化学肥料を出来るだけ控えた環境保全型農業に積極的に取り組み、平成11年には国の特別栽培農産物に係るガイドラインに従った減農薬栽培へと発展していきました。このような下地があったため、「ちばエコ農産物」の認証制度への取り組みはそれほど難しいものではなく、制度が創設された平成14年より認証を受け、現在に至っています。



## 6 栽培方法

### (1) 播種及び育苗

200穴程度のセルトレイへコート種子を播種し、コートが少し見える程度に覆土します。下穴から水が出るくらい十分に灌水し、根巻き不足の防止として20cm以上の高床にします。育苗期は害虫の侵入防止及び高温対策として白寒冷紗等で日よけをします。また、育苗中の多湿は病気を助長するため、灌水は土壌表面が白く乾いてから午前中に行い、夜間に余分な水分は残さないようにします。

### (2) 定植

リーフレタスは初期に乾燥等で活着不良を起こすと生育が滞ります。定植直前に一度セルトレイへ灌水、さらに定植後も株ごとにも散水を行い、活着の促進を促します。また、ネキリムシ類による食害を防止するため、定植時にカルホス微粒剤Fを散布します。

### (3) ベタがけ被覆

定植後、ただちに寒冷紗や不織布等をべたがけします。これにより強風による株傷みの防止と害虫の侵入防止ができます。べたがけを実施した場合には初期の害虫発生は現地ではほとんど見られません。

なお、べたがけ被覆は株がある程度育った段階で（2週間から1ヶ月を目安に）除去します。

ア 栽培管理（産地事例より）

作業名	実施年月日
前作収穫終了	平成17年7月25日
播種	9月10日
耕起	10月7日
定植	10月7日
病虫害防除	9月5日～11月7日
収穫開始	12月12日
収穫終了	12月22日

イ 使用資材

(ア) 土づくり・施肥等

(10a当たり)

使用銘柄 (N:P:K)	実施年月日	施用量	全 N	化学N
豚ふん等 (土づくり)	平成17年8月11日	2 t		
苦土石灰	10月7日	60kg		
苦土重焼燐 (0:35:0)	10月7日	40kg		
マイルドユーキ030号(10:13:10)	10月7日	160kg	16kg	7.5kg
合 計			16kg	7.5kg

(イ) 病虫害・雑草防除等

使用農薬	対象病虫害	実施年月日
テロン92	ネグサレセンチュウ、ネコブセンチュウ	平成17年9月5日
カルホス微粒剤F	ネキリムシ類	10月7日
アフーム乳剤	ハスモンヨトウ、オオタバコガ	11月7日
アドマイヤーフロアブル	アブラムシ類	11月7日
トップジンM水和剤	菌核病	11月7日
化学合成農薬使用回数5回（総使用回数5回）		

(4) トンネル被覆

平均気温が10℃以下になる11月中下旬頃にトンネル被覆（厚さ0.1mmビニール）を行い、寒害防止に努めます。被覆当初は両裾を開けておき、厳冬期に入ったら北側を下ろします。換気が不足するとトンネル内の湿度が高くなり、病気の発生を助長します。

なお、トンネル被覆前にすそ枯れ病や菌核病の防止として予防効果のある殺菌剤及びオオタバコガ等の害虫防除として殺虫剤を散布しておきます。防除のタイミングを見極めることが結果的に化学農薬の削減につながります。

## 7 今後の展望等

現在栽培されている「リーフレタス」はサニー、グリーン、フリル、コスレタスと豊富な種類があり、全体の栽培面積は40haとなっています。このうち、「ちばエコ農産物」の認証を受けているものはサニー及びグリーンレタスが中心です。今後は他の種類でも認証を検討し、「ちばエコ農産物」の生産拡大を図っていきます。

飯岡地域では「リーフレタス」の他にキャベツ、だいこんにおいても積極的に「ちばエコ農産物」の認証を受けています。冬季にほ場を巡回すると「ちばエコ農産物」の看板がいたるところに立っているのがわかります。今後は消費者・実需者への積極的な農産物PRはもちろん、当地域が環境に配慮した農業の意識が高い地域であることを活用し、「地域の売込み」をもっと積極的に行ない、有利販売につなげていきます。

また、隣接している海上地域において新たにリーフレタスの栽培が開始されました(本年度3.5ha)。今後は海上地域においても生産規模の拡大、安定生産支援を図るとともに、「ちばエコ農産物」の認証へ取り組んでいきたいと考えています。

# 水稻(ちば28号(愛称:ふさこがね))

山武農林振興センター

## 1 地区名(集団名)

山武郡大網白里町細草地区

## 2 栽培戸数、面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

- (1) 栽培戸数 3戸
- (2) 栽培面積 270 a
- (3) 収穫量 14.58 t 540kg/10 a
- (4) 出荷先 山武郡市農業協同組合

## 3 ちばエコ基準達成状況

区 分	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬(成分回数)	5回	7回
化学肥料(窒素分量)	2.36kg/10a	4.5kg/10a

## 4 事例のあらまし

「ちば28号(愛称:ふさこがね)」は、本年度から一般栽培がスタートしました。「ふさこがね」の病気に強い特徴を生かし、早速、「ちばエコ農業」産地拡大スピードアップ支援事業の展示ほとしての積極的な取り組みを行いました。

栽培は、JAグループ千葉もっと安心米の統一栽培暦を参考に、倒伏させないことを第一に、収量を標準栽培より一割程度低く設定した計画に沿って行いました。その結果、生育前半の日照不足により穂数がやや少なくなったものの、目標どおりの収量が確保できた上、登熟歩合は90.2%、玄米千粒重は25.9gで、品質も良好となり、初年目としてはまずまずのスタートを切ることができました。

展示ほに組み込んだ生産者は、本年度の結果に手応えを感じ、来年度の取り組みにも意欲的です。

## 5 背景・動機

「ふさこがね」は、地域の作付品種割合が早生と晩生の二極化傾向となってきた状況でデビューした高品質な中生品種であることから、本年まき種子注文量が非常に多く、

当品種に対する農家の期待の大きさが伺えました。

こうした状況の中で、「ふさこがね」が「ちばエコ米」として計画申請されたことを受け、今後の普及を見据え、展示ほ場として実施することとなりました。



「ちば28号」の  
展示ほ場現地検討会



順調な生育でスタート

## 6 栽培方法

施肥と薬剤防除については、もっと安心米の統一栽培暦に準じ、それ以外については、県の栽培指針に準じた管理を行いました。

### (1) 播 種

育苗箱1箱当たり150g（乾籾換算）播きとしました。

### (2) 育 苗

は種後、32℃で40時間の出芽処理を行い、ハウス内平置き方式で育苗しました。

### (3) 施 肥

施肥体系は慣行栽培に準じ、基肥+穂肥の体系としました。

基肥：有機質由来窒素100%の肥料を使用しました。

肥料分の溶出が遅いため、早めに施用しました。

ア 栽培管理

作業名	実施年月日
前作収穫終了	平成17年9月10日
耕起	10月30日
播種	平成18年3月18日
田植	4月25日
病虫害防除	4月25日
収穫	8月23日

イ 使用資材

(ア) 土づくり・施肥等

(10aあたり)

使用銘柄 (N:P:K)	実施年月日	施用量	全 N	化学N
稲ワラ	平成17年10月6日	0.5 t		
有機アグレット (6:7:3)	平成18年2月27日	60kg	3.6kg	0 kg
有機追肥530特号 (15:3:10)	7月7日	20kg	3.0kg	2.36kg
合 計			6.6kg	2.36kg

(イ) 病虫害・雑草防除等

使用農薬	対象病虫害	実施年月日
※エコホープ	もみ枯細菌病、ばか苗病等	平成18年3月5日
ウィンバリアード箱粒剤	いもち病、イネミズゾウムシ等	4月25日
アピロスター1キロ粒剤	ノビエ等の雑草	5月1日
化学合成農薬使用回数5回 (総使用回数6回)		

※印は、「化学合成農薬に含めない農薬」

(4) 薬剤防除

病虫害防除は、田植当日にいもち病および初期害虫対策として育苗箱施用薬を使用しました。

雑草防除については、田植6日後に一発処理の1キロ粒剤を施用しました。

(5) 田植

植付適期内の4月25日に行いました。

(6) 水管理

中干しや落水などの管理は、慣行栽培に準じて行いました。

(7) 収穫

帯緑色籾歩合15%の適期収穫を行いました。

## 7 今後の展望等

本年度の取り組みの結果、「ふさこがね」を「ちばエコ米」基準により栽培する場合の課題（品質、収量の確保等）については見通しがつき、初年目としてはまずまずのスタートを切ることができました。「ふさこがね」は、倒伏及びいもち病に強い品種特性を備えていることから、「コシヒカリ」に比べて「ちばエコ米」の栽培に取り組みやすい品種であり、大面積での取り組みも可能と考えられるため、生産集団や大規模農家等による産地指定制度の活用も期待されます。

一方、作った米をいかに有利販売につなげるかについても、併せて検討する必要があります。県ではホームページをはじめとした広報活動を積極的に行っているところですが、近頃では、「ちばエコ米」認証者の方から「米の流通業者から問合せがあった」、「新たな売り先が確保できた」といった声も寄せられるようになり広報の効果が徐々に現れてきました。

今後も、JAや生産者等と連携しながら、「ちばエコ米」をはじめとした山武の米の評価が高まるよう支援をつづけてまいります。

# たまねぎ・マルチ（品種：ソニック）

長生農林振興センター

## 1 地区名（集団名）

長生郡白子町（白子町玉葱出荷組合）

## 2 栽培戸数、面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

- (1) 栽培戸数 1組合
- (2) 栽培面積 13a
- (3) 収穫量又は出荷量 3,900kg
- (4) 出荷先又は販売方法 「白子たまねぎ祭り」での直販

## 3 ちばエコ基準達成状況

区 分	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬(成分回数)	5回	8回
化学肥料（窒素分量）	12kg/10a	12kg/10a

## 4 事例のあらまし

白子町の主要品目の5月収穫のたまねぎにおいて、白子町玉葱出荷組合が中心となり、「ちばエコ農産物」栽培基準での栽培に取り組みました。その結果、化学合成農薬の使用回数は5回、化学肥料由来の窒素成分は12kgと、「ちばエコ農産物」栽培基準内で栽培することができました。栽培圃場は「たまねぎ祭り」での販売を目的に白子町玉葱出荷組合の組合員が総出で定植から収穫まで管理し、収穫したタマネギは平成18年5月14日に行われた「第6回白子たまねぎ祭り」の会場で来場者に販売され、大変好評でした。

## 5 背 景

白子町のたまねぎ栽培の歴史は大正時代にさかのぼりますが、急速に面積が拡大したのは、マルチ栽培による早出し栽培が可能となった昭和30年後半で、昭和41年には国の指定産地となりました。

しかし、近年は高齢化や労力不足、価格低迷等の理由により生産量は年々減り、栽培者数も最盛期の4割まで減少してしまいました。その一方で5月上旬に他の産地に先駆けて出荷され、また水にさらさなくても生で食べられるほど甘みが強いたまねぎは、食味においては高い評価を得ています。

白子産たまねぎの美味しさを多くの消費者に知ってもらおうと、6年前から毎年5月に「白子たまねぎ祭り」を開催し、新たな販売方法としてたまねぎ狩りも行われるようになりました。その甲斐あって口コミで徐々に知名度は高まり、たまねぎ狩りの来場者



も毎年前年対比で200%以上の伸びを示すほど人気となりました。

白子のたまねぎの味の秘密は、冬でも温暖な九十九里浜の海の恩恵をうけた環境で栽培されていることに加え、生産者自身が食味の良い品種を選定し、積極的に堆肥を使った土づくりを行ってきたことにあります。

このかけがえのない生産環境を守り、さらに白子産たまねぎの魅力をアップさせるためにも、出来るだけ環境に配慮した栽培を行い、その取り組みをきちんと消費者にPRしていくことが必要と考えました。そこで千葉県が推進する「ちばエコ農業」に玉葱組合が一丸となって取り組むことになりました。



組合員全員で定植作業を行う



6回目を迎えた「白子たまねぎ祭り」

## 6 栽培方法

### (1) は 種

高温期のは種のため、立枯病が問題となる時期です。発病後の防除は難しいため、予防策として立枯病の防除薬剤を粉衣した種子を使用しました。また、台風や大雨等による冠水被害を出来るだけ受けられないよう苗床は高畝としました。

### (2) 育 苗

発芽揃いまでは特に多くの水を必要とするため、高温多湿になりやすく立枯病の被害が最もしやすい時期です。発芽までは寒冷沙やワラで被覆し地温が上がり過ぎないようにし、発芽後は徐々に灌水を減らしていき、徒長を防いで健苗に育てることで、病気にかかりにくい苗に育てていきました。また、除草剤を使用する代わりとして手作業による草取りを1回実施しました。苗床から本圃への病害虫の持ち込みは、防除を困難にし、薬剤散布回数の増加にもつながってしまうので、苗床での病害虫の防除を徹底しました。このため、病害虫の発生源となる雑草の除草を行い、苗床での薬剤防除においてはむやみに回数を抑えるのではなく、予防散布に重点を置き、定期的な薬剤散布を実施しました。

### (3) 施 肥

堆肥を十分に施用することで、基肥、追肥ともに減らし、堆肥以外の窒素施用量

を慣行の半分以下に抑えることができました。また、地力が向上したことで、根張りが良くなり、堅強な株に育ち、病害の発生が少なくなったことで、薬剤防除の回数も最小限に抑えることが出来ました。

(4) 定植

雑草を抑えるため黒マルチを使用することで、定植時の除草剤散布1回で雑草の発生をある程度抑えることが出来ました。また、タネバエ対策としてダイアジノン粒剤5を使うことで、被害の大きな定植～活着までの期間の寄生を防ぐことが出来ました。マルチの穴の間隔は慣行では条間15cm、株間12～15cmのものが使用されていますが、当栽培では株間の一番広い15cmの有孔マルチを使用しました。株間が広がることで栽植本数は減ってしまっていますが、肥大は良くなり、株と株の間隔にも余裕が生まれるため、通気性が向上し、病虫害の発生が少なくなりました。

(5) 本圃での管理

基肥の窒素施用量は3.1kgと慣行の3割弱の窒素成分量とし、その代わりに豚糞堆肥を施用し窒素成分の不足分を補いました。本年は記録的な寒さのため、初期生育の遅れが見られたため、2月10日に速効性の硫安の追肥を行いました。それでも通常は3～4回行う追肥の回数も2回で抑え、十分な収量を得ることが出来ました。

ア 栽培管理

作業名	実施年月日
前作収穫収量	平成17年5月5日
耕起	10月15日
播種	9月20日
施肥	12月2日
定植	12月2日
追肥	平成18年2月10日、3月15日
収穫開始	5月12日

イ 使用資材

(ア) 土づくり・施肥等

(10aあたり)

使用銘柄 (N:P:K)	実施年月日	施用量	全N	化学N
豚糞・籾殻堆肥	平成17年10月25日	5 t		
野菜美人	12月2日	30.8kg	3.1kg	3.1kg
野菜美人	平成18年2月10日	4.8kg	0.5kg	0.5kg
硫安	2月10日	23.1kg	4.7kg	4.7kg
NKグリーン	3月15日	23.1kg	3.7kg	3.7kg
合 計			12.0kg	12.0kg

## (イ) 病害虫・雑草防除等

使用農薬	対象病害虫	実施年月日
※オーソサイド水和剤80	苗立枯病	粉衣済種子を購入
ダコニール1000	べと病、灰色かび病	17年10月4日、10月15日、11月7日
ゴーゴーサン乳剤30	畑地一年生雑草	12月2日
ダイアジノン粒剤5	タネバエ	12月2日
化学合成農薬使用回数5回（総使用回数5回）		

※印は、購入種苗の消毒はカウントしない。

## 7 今後の展望等

本年の冬は記録的な寒さとなり12月から厳しい冷え込みが続いていました。通常たまねぎの定植は11月中旬に行われますが、苗の準備が間に合わず、定植は12月2日になってしまいました。堆肥を十分に施用してはいるものの、基肥、追肥をあわせた窒素施用量を、慣行の半分以下に抑えたため、収量品質の低下が懸念されましたが、寒さと12月定植による肥大の遅れはあったものの、「ちばエコ農産物」栽培基準による収量品質の低下はありませんでした。堆肥を十分に施用することで化学肥料の代替は可能であり、食味に与える堆肥施用の効果を考えて、食味の良さで差別化を図っていく上で、ちばエコ農業の取り組みは望ましい方向であると感じました。

たまねぎでは定植後は気温も低下するため病害虫の発生も少なく、ほとんど防除の必要はありません。そのため苗床での防除が中心となります。葉たまねぎで苗床の太陽熱消毒の実証を行ったところ、雑草の発生が長期間にわたって抑えられ、苗床で問題となるべと病の発生もほとんどありませんでした。

次年度はたまねぎの苗床についても太陽熱消毒による病害虫、雑草の防除などの耕種的な防除法についても実証を行っていくほか、登録農薬の少ない葉たまねぎで多く使われている銅水和剤、微生物農薬についてもたまねぎで実証を行っていきたいと考えています。

また、施肥についても肥効調節型肥料や、より有機質含量の高い肥料の利用など、減肥と品質向上の両方につながる施肥技術の向上についても検討を行っていく予定です。そして、ちばエコ農業が標準の栽培技術となるよう、環境にやさしい栽培技術を普及推進し、白子産たまねぎのファンを増やしていくことで、販売促進とちばエコ農産物の消費拡大にもつなげたいと考えています。

# 日 本 な し

夷隅農林振興センター

## 1 地区名（集団名）

いすみ市岬町

## 2 栽培戸数、面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

- (1) 栽培戸数 1戸
- (2) 栽培面積 82.6 a
- (3) 収穫量又は出荷量 26.5 t
- (4) 出荷先又は販売方法 直売

## 3 ちばエコ基準達成状況

区 分	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬(成分回数)	23回	26回
化学肥料(窒素分量)	9.2kg/10a	13kg/10a

## 4 事例のあらまし

いすみ市岬町は、温暖な気候に恵まれ、古くから日本梨の早出し産地として発展してきました。現在、一宮・岬梨組合岬支部の生産者は73名、栽培面積は43haであり、「幸水」「豊水」「新高」などが作られています。

本事例農家は、経営面積が日本梨82.6 a、ブドウ8 aであり、家族労働力は3人で、受粉時のみ雇用労力を活用しています。また、販売方法は主に自家直売です。

以前から性フェロモン剤を活用するなどして減農薬化に取り組むと共に、有機質肥料主体の施肥体系への転換を進め、平成18年に「ちばエコ農産物」の認証を得ました。

## 5 背景・動機

いすみ市岬町においても、新住民との混住化による農村環境の変化により、農薬散布や剪定枝の焼却が難しくなるなど、日本梨の生産をめぐる状況は年々厳しくなっています。こうした背景から、地域の環境と調和しながら安全・安心で高品質の日本梨を生産し、消費者に支持される産地となるために、生産者と関係機関が連携し、環境にやさしい農業に向けた取り組みを進めてきました。

平成13年度に町単独による「環境にやさしい農業推進対策事業」、平成14年度からは県の「環境にやさしい農業推進対策事業」を活用し性フェロモン剤の導入を進め、生産者の減農薬化事例から殺虫剤削減の指針を作成するなどし、減農薬技術普及を図ってきました。現

在では、性フェロモン剤の導入は栽培面積の50%以上を占めるようになっていきます。

本事例農家は直売主体であり、よりおいしく安心して食べられる日本梨を消費者に提供するため、以前から性フェロモン剤を活用するなどして減農薬化に取り組むと共に、有機肥料主体の施肥体系への転換を進めてきました。平成17年には後継者が経営移譲を受け、「ちばエコ農産物」栽培基準を目標にした、減農薬、減化学肥料に取り組みました。日本梨で「ちばエコ農産物」の認証を得ることは簡単ではありませんが、それを日本梨栽培における目標のひとつに据えて、更に意欲的に日本梨栽培に取り組みたいという後継者の考えも、「ちばエコ農産物」認証取得への動機となりました。



幟旗を梨園に設置して消費者に直接PR



安心を消費者に提供できる梨栽培を目指す

## 6 栽培方法

### (1) 品 種

「幸水（簡易被覆、露地）」「豊水」「新高」「あきづき」

### (2) 土づくりおよび施肥

粘土質の土壌であるため、暗渠排水の整備やホールディガーを活用した堆肥の局所施用などにより根圏環境を整え、土づくりを行ってきました。

肥料は、油かす、魚粕、カニガラなど有機質を主体とし、化成肥料の使用を大幅に抑えると同時に、施肥の時期や施用量を調節し、有機質肥料の遅効き防止に取り組みました。

### (3) 病虫害防除

第一に、効率的な防除を行うことが出来るよう、結果枝間隔を広く保っています。特に、日本梨の主要病害である黒星病に対しては、落葉処理や越冬病班の除去など耕種的防除を徹底し、農薬散布のみに頼らない防除を行いました。

また、害虫に対しては、シンクイムシ類、ハマキムシ類を対象とした性フェロモン剤を設置した上で、無駄に予防的な薬剤散布は行わず、害虫の発生を確認してからそれに対応する防除を行うように努めました。

ア 栽培管理（露地「幸水」）

作業名	実施年月日
前作収穫終了	平成17年8月23日
収穫開始	平成18年8月3日
収穫終了	8月15日

イ 使用資材

(ア) 土づくり・施肥等（露地「幸水」）

(10a当たり)

使用銘柄 (N:P:K)	実施年月日	施用量	全 N	化学N
牛ふんもみがら堆肥	平成17年12月6日	2 t		
もみがら燻炭	12月6日	25kg		
米ぬか	12月6日	250kg		
なたね油かす粉末 (5.3-2-1)	8月19日	140kg	7.42kg	
	12月6日	100kg	5.3 kg	
	平成18年4月19日	160kg	8.48kg	
尿素(46-0-0)	平成17年9月22日	20kg	9.2kg	9.2kg
カニガラ(3-4-0)	12月6日	50kg	1.5kg	
魚粕(7-4-0)	12月6日	140kg	9.8kg	
有機アグレットバイオFミール特号(6-5.5-0)	平成18年5月23日	60kg	3.6kg	
ロイヤルグアノ(0-23-0)	5月10日	40kg		
合 計			45.3kg	9.2kg

(イ) 病虫害・雑草防除等（露地幸水）

使用農薬	対象病虫害	実施年月日
デランフロアブル	黒星病 芯腐れ症（胴枯病菌）	平成17年11月4日 平成18年4月3日 4月26日
※ハーベストオイル	ハダニ類	平成17年11月4日
マネージDF	黒星病	平成18年4月3日
サニパー	黒星病	4月15日 5月26日
ダイアジノン水和剤34	ナシヒメシクイ、ハマキムシ類、アブラムシ類、クワコナカイガラムシ若齢幼虫	平成18年6月21日
スコア顆粒水和剤	黒星病	4月15日
バリアード顆粒水和剤	アブラムシ類、シクイムシ類	4月15日
※コンフューザーN	ナシヒメシクイ、モモシクイガ、チャハマキ、チャノコカクモンハマキ	5月18日

使 用 農 薬	対 象 病 害 虫	実施年月日
ベルコートフロアブル	黒星病、輪紋病	平成18年5月6日 5月16日 6月8日 7月1日
ハチハチフロアブル	ニセナシサビダニ、アブラムシ類	5月16日
モスピラン水溶剤	アブラムシ類、シンクイムシ類、クワコナカイガラムシ	6月8日
ストロビードライフロアブル	黒星病、輪紋病	6月21日
オーソサイド水和剤80	黒星病、輪紋病	平成17年10月24日 平成18年6月21日
インダーフロアブル	黒星病	7月1日
アミスター10フロアブル	輪紋病、黒星病	7月13日
バロックフロアブル	ハダニ類	7月13日
ロディー水和剤	シンクイムシ類、ハマキムシ類	7月13日
ジベレリン協和ペースト	熟期促進	5月15日

※印は、「化学合成農薬に含めない農薬」

## 7 今後の展望等

日本梨栽培の「ちばエコ農産物」栽培基準は非常に厳しいため、基準を見直さない限り、生産組合単位で認証を取得することは不可能です。日本梨では、減農薬・減化学肥料の取り組みを直接消費者に伝え、PRすることのできる、直売主体の生産者に対して、「ちばエコ農産物」認証を推進していくべきと考えられます。

減農薬・減化学肥料に関する消費者の関心は高いものの、減農薬・減化学肥料によって販売単価を高く設定することはあまり現実的ではありません。単価の向上を目的とするのではなく、優先的に購入してもらえる高品質の日本梨生産を目指すことが、日本梨におけるちばエコ農産物認証の位置づけになるのではないのでしょうか。

# エンダイブ・秋冬どり（品種：フランス）

安房農林振興センター

## 1 地区名（集団名）

南房総市富山地区（JA安房野菜部富山支部エンダイブ生産者）

## 2 栽培戸数、面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

- (1) 栽培戸数 6戸
- (2) 栽培面積 84a
- (3) 収穫量又は出荷量 117.6t
- (4) 出荷先又は販売方法 安房農業協同組合

## 3 ちばエコ基準達成状況

区 分	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬(成分回数)	2回	5回
化学肥料（窒素分量）	10kg/10a	12.5kg/10a

## 4 事例のあらまし

エンダイブは非結球レタスの一種です。和名では「ニガチシャ」と呼ばれます。その名の通り、菊のような姿と、ほろ苦い味が特徴です。管内では富山地区と鋸南地区で栽培されています。

JA安房野菜部富山支部では、現在17戸がエンダイブの生産に取り組んでいます。そのうちの約1/3にあたる6戸が、平成18年度からちばエコ栽培をスタートしました。

管内で生産される有機質資源を有効に活用し、土づくりを行っています。

## 5 背景・動機

安房地域は古くから洋菜類の栽培が盛んだった地域です。中でも富山地区はセロリやさやいんげんの産地として知られています。エンダイブも終戦後から栽培が始まり、共選出荷が始まってから20年以上の歴史を持つ産地です。

しかし、近年農産物の価格低迷が続き、他産地との差別化を図る必要が出てきました。また、無登録農薬の使用問題や、輸入農産物の残留農薬事件などを受け、マイナー作物であるエンダイブの生産は、難しい立場に置かれました。



薬剤が限られている中で、安全性と品質を両立した物を出荷するため、産地では努力を続けてきました。

「この取り組みを消費者の目に見える形にしたい」「生産者の顔の見えるエンダイブを届けたい」という産地からの声を受け、平成17年にエンダイブのちばエコ栽培基準が設定されました。そして18年に栽培計画の承認を受け、ちばエコ栽培が始まりました。



順調に生育する「ちばエコ」エンダイブ



収穫・調整後の荷姿

## 6 栽培方法

### (1) 土づくり

安房管内の畜産農家が生産している牛糞堆肥を利用して、土づくりを行っています。また化学合成肥料の削減のため有機配合肥料を利用します。

### (2) 播種・定植

セルトレイに播種し、1ヶ月程度育苗して定植します。時期をずらしながら、数回に分けて播種・定植を行います。

### (3) 病虫害防除

銅水和剤など「ちばエコ農業」化学合成農薬に含めない農薬を活用し、化学農薬の使用回数の削減を図りました。また初期防除の徹底のため、定植時に粒剤を使用します。

### (4) 結 束

エンダイブは苦みを和らげ、おいしく食べるために中心部を軟白させます。このために、株を結束する作業を行います。結束中に蒸れると病害の発生や、品質の低下を招くので、作業には細心の注意を払います。

## ア 栽培管理

作業名	実施年月日
前作収穫終了	平成18年4月24日
起 耕	8月5日
播 種	8月15日
定 植	9月7日
病虫害防除	9月3日～11月10日
収穫開始	11月20日
収穫終了(予定)	平成19年3月31日

## イ 使用資材

### (ア) 土づくり・施肥等

(10a当たり)

使用銘柄 (N:P:K)	実施年月日	施用量	全 N	化学N
牛糞堆肥	平成18年8月20日	0.9 t		
鶏糞 (3.8:6.6:3.1)	9月3日	300kg	11.4kg	
有機アグレット088号 (10:8:8)	9月3日	200kg	20kg	10kg
合 計			31.4kg	10kg

### (イ) 病虫害・雑草防除等

使用農薬	対象病虫害	実施年月日
カルホス微粒剤F	ネキリムシ類	平成18年9月3日
アフーム乳剤	ハスモンヨトウ・オオタバコガ	11月10日
※Zボルドー	斑点細菌病・軟腐病	11月10日

※印は、「化学合成農薬に含めない農薬」

## 7 今後の展望等

ちばエコ栽培に取り組むにあたり、栽培計画については生産者の話し合いが重ねられました。このことをきっかけに、生産者に生産履歴記帳の重要性が再認識され、土づくりや農薬に対する意識も変わってきています。また、今年申請をした生産者だけでなく、他の生産者もちばエコ農産物に対する関心が高まりました。安心・安全な栽培技術の向上に取り組むとともに、今後は関心を持った生産者を中心に、ちばエコ栽培の拡大を図っていきます。

千産千消の観点から、県内市場を中心とした出荷から開始しました。また、地元でもエンダイブが手に入るよう、直売所での販売も行っています。今後は出荷量の増加と、

京浜市場も視野に入れた出荷を目指します。

エンダイブは、まだまだ馴染みの薄い野菜です。まず消費者にエンダイブを知ってもらう必要があります。また、ちばエコ農産物自体の認知度を上げることも必要です。今後はエンダイブの消費提案や、他の作物と連携し、ちばエコ農産物のPR活動等を検討したいと考えています。

# ほうれんそう・夏どり(品種:ジョーカー)

君津農林振興センター

## 1 地区名(集団名)

木更津市牛袋地区

## 2 栽培戸数、面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

- (1) 取り組み戸数 1戸
- (2) 栽培面積 12a
- (3) 収量又は出荷量 0.6t/10a
- (4) 出荷先 大一木更津青果

## 3 ちばエコ基準達成状況

区 分	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬(成分回数)	1回	4回
化学肥料(窒素分量)	6.0kg/10a	6.0kg/10a

## 4 事例のあらまし

木更津市牛袋地区では、ハウス栽培による夏どりほうれんそうを含めて、多品目周年出荷のちばエコ農業に取り組む農家が3戸います。

平成15年以前より、農薬使用回数を抑えた栽培を行っていた地域で、ちばエコ農業に対しても積極的に取り組んでいます。

取り組み当初は、肥料の流亡や虫害などが原因で、ほうれんそうの収量の減少がみられましたが、堆肥の施用による土壌改善や、肥料の比較試験を通じて施肥設計の見直し、防虫ネット等を利用した耕種的防除を行うなど、現在は安定した収量を確保しています。

## 5 背景・動機

木更津市牛袋地区は、市街地が近く消費地への交通の便も良いため、集約的な都市型農業を営む農家の割合が多い地域です。

現在は、同じ地域内で3戸の農家が、水稻・こまつな・えだまめ・たまねぎなど、多品目でちばエコの認証を受け、周年でちばエコ農産物を出荷しており、夏どりほうれんそうもそのうちの1つです。

初めてちばエコ農業に取り組んだ農家は、昔ハウス内での防除作業中に農薬中毒にかかった経験があり、それ以来農薬散布の回数を減らして作業者に負担のかからない栽培管理に努めてきました。そのため、ちばエコ農業以外にも、エコファーマーの認証に意欲的です。



## 6 栽培方法

### (1) 品種選定

夏どりハウス栽培なので、耐暑性のある品種が必須になります。毎年、種苗会社が主催する圃場見学会に参加して、有望そうな品種を選定しています。

### (2) 圃場管理

水田地帯にハウスがあり、降雨があるとハウス内に浸水することが多かったので、ハウス内に暗きよを完備し排水性を向上させました。結果として、ハウス内が過湿状態になることは少なく、べと病などの病害発生が抑えられています。

### (3) 灌水

気温の高い昼間、特に幼苗期間は頻繁に頭上灌水をおこない、気温の上昇を抑え

ています。

#### (4) 施 肥

牛袋地区は水田からの転換畑が多く肥料が流亡しやすいので、夏どりほうれんそうは施肥量の「ちばエコ農産物」栽培基準の達成が難しいです。そこで、毎年いくつかの肥料比較試験を行い、圃場の土壌条件に適した施肥設計を立てています。

現在は、塩類集積のおそれのある化成肥料は極力避けて、鶏ふんを中心とした肥料設計にしています。要素欠乏の症状が現れそうになったら、微量要素を補うための追肥を行っています。

#### (5) 病虫害防除

発芽～幼苗期にかけては、遮光を兼ねて防虫ネットを被覆します。夏どりほうれんそうは作期が短いので、小規模の病虫害であれば農薬の散布は行わない方針をとっています。

#### (6) そ の 他

遮光や灌水によりハウス内の温度上昇を抑え、生育速度を抑えることで、苗の軟弱徒長を防いでいます。

### ア 栽培管理

作 業 名	実 施 年 月 日
前作収穫終了	平成18年 7 月 5 日
播 種	8 月 4 日
病虫害防除	9 月 5 日
収 穫 開 始	9 月 20 日
収 穫 終 了	9 月 30 日

### イ 使用資材

#### (ア) 土づくり・施肥等

(10 a 当たり)

使用銘柄 (N:P:K)	実 施 年 月 日	施用量	全 N	化学N
鶏ふん	平成18年 7 月 31 日	2.0 t		
ダイヤアミノ (8-9-7)	7 月 31 日	120kg	9.6kg	6.0kg
合 計			9.6kg	6.0kg

#### (イ) 病虫害・雑草防除等

使 用 農 薬	対 象 病 害 虫	実 施 年 月 日
アフーム乳剤	ハスモンヨトウ	平成18年 9 月 5 日

## 7 今後の展望等

夏どりほうれんそうは施肥設計が難しいので、栽培土壌に適した施肥設計が求められます。また、施用する堆肥によっては石灰が過剰となり、土壌中に蓄積していく傾向があるので、堆肥の選定も今後の課題です。

現在、牛袋地区内で夏どりほうれんそうの「ちばエコ農産物」認証を受けている農家は1戸ですが、同地区内で葉菜生産農家への普及拡大を図って、地域全体の取り組みへと発展させることと、夏どりほうれんそう以外のいくつかの品目を組み合わせて、ちばエコ農産物の周年出荷が可能な地域として流通業者や小売店へのPRを行い、有利販売につなげていくことが目標となります。

資料

(1)「ちばエコ農業」化学合成農薬及び化学肥料の使用基準（上限）  
 ア 土耕栽培「化学合成農薬及び化学肥料の使用基準（上限）」

分類	作物名（作型等）		化学合成農薬 使用回数 (使用成分×回数)	化学肥料使用量 (窒素成分量 kg/10a)	堆肥施用量 (kg/10a)*	収穫期	備考
水稲	水稲		7	4.5	500～1000		
		乾田直播	8	4.5	1000		
普通 畑作物 等	小麦		5	9	1500		
	さつまいも	早掘	5	1.5	500	7～8月	化学合成農薬は苗切り離し以降の使用回数
		トンネル	5	1.5	500	7～8月	
		普通	6	1.5	500	9～11月	
	落花生	マルチ	2	1.5	500		
	大豆	転換1～2年目	4	3	-		
		転換3年目以降		6			
茶	成木園	6	24	-			
野菜	だいこん	春どり	4	7.5	2000	3～4月	
		初夏どり	6	5		5～6月	
		秋どり	6	1.5		10月	
		冬どり	5	4.5		11～2月	
	にんじん	トンネル春どり	6	10	2000		
		秋冬どり	8	7.5			
	こかぶ	冬どり	3	9	1000	12～3月	
		春どり	3	13		4～5月	
		初夏どり	4	6		6月	
		夏どり	4	1.5		7～9月	
		秋どり	5	6		10～11月	
	さといも	マルチ	5	9	2000		
		トンネル	3	7.5	1000		
	やまといも	普通	11	10.5	1000		
	じねんじょ		8	16	2000		
	キャベツ	春どり	8	14	2000	4～6月	
		秋どり	8	14	2000	10～11月	
		冬どり	8			12～3月	
	ねぎ	春どり	15	14	2000	4～5月	
		坊主しらず	13	15	2000	5～6月	
		初夏どり	11	12		6～7月	
		秋冬どり	18	13	2000	10～3月	
	葉ねぎ	春どり	4	10	2000	3～5月	
		夏どり	5	9		6～9月	
		秋どり	5	10		10～11月	
		冬どり	4	11		12～2月	
	根みつば		2	5	1000	2～4月	
レタス	秋どり	7	10	2000	10～11月		
	冬どり	9	12	2000	12～2月		
	春どり	9	12	2000	3～5月		
非結球レタス		7	12.5	2000		リーフレタス、かきちしゃ(サンチュ等)	
エンダイブ	秋冬どり	5	12.5	2000	10～3月		
ほうれんそう	春どり	3	6	2000	3～5月		
	夏どり	4			6～9月		
	秋どり	4	10		10～11月		
	冬どり	3	12.5		12～2月		
こまつな	春どり	3	10	2000	3～5月		
	夏どり	3	5.5	2000	6～9月		
	秋どり	4	10	2000	10～11月		
	冬どり	3	8.5		12～2月		



分類	作物名(作型等)		化学合成農薬 使用回数 (使用成分×回数)	化学肥料使用量 (窒素成分量 kg/10a)	堆肥施用量 (kg/10a)*	収穫期	備考
野菜	みずな	春どり	2	5	2000	3~5月	
		夏どり	3	3.5		6~9月	
		秋どり	2	5		10~11月	
		冬どり	2	6.5		12~2月	
	ルッコラ	春どり	2	6	2000	3~5月	
		夏どり	3	6		6~9月	
		秋どり	2	10		10~11月	
		冬どり	2	10		12~2月	
	からしな	冬どり	2	10	2000	2~3月	
	はくさい	秋冬どり	6	13	2000	11~1月	
	食用なばな	秋冬どり	7	20	2000		
	しゅんぎく	秋冬どり	7	11.5	2000	10~4月	
	にら	ハウス・トンネル	播種から1年間 19 かつ収穫1期につき2 次の1年間 19 かつ収穫1期につき2	播種から1年間 17.5 次の1年間 9	3000	11~6月	
		露地夏どり	播種から1年間 14 かつ収穫1期につき2 次の1年間 17 かつ収穫1期につき2	播種から1年間 17.5 次の1年間 9	3000	7~9月	
	茎葉かんしょ		2	7	1500		化学合成農薬は苗切り離し以降の使用回数
	セルリー	ハウス春どり	11	25	5000	2~3月	
	ブロッコリー	秋冬どり	6	14.5	2000	10~3月	
	カリフラワー	秋どり	3	15	3000		苗購入の場合
	チンゲンサイ		5	7.5	2000	周年	
	タアサイ		5	7.5	2000	周年	
	大葉		10	14	3000		
	えだまめ	ハウス	3	2.5	1000		
		トンネル	3	2.5	1000		
		マルチ	4	2.5	1000		
		露地	5	3	1000		
	さやえんどう	露地	5	4.5	2000		
	そらまめ	トンネル	5	7.5	2000		
マルチ		5	4.5	2000			
食用とうもろこし	ハウス半促成	2	17	3000	5~6月		
	トンネル	3	17	3500			
	マルチ		16	2000			
トマト	促成	28	26	3000	10~6月		
		21	18.5		10~2月		
	半促成	17	18.5		2~6月		
		15	18.5		4~7月		
	抑制	15	12	2000			
ミニトマト	促成	23	28.5	3000	10~6月		
	半促成	15	18.5		4~6月		
	抑制	16	11		8~12月		
きゅうり	促成	32	30	3000			
	抑制	20	13.5	2000			
	ハウス早熟	20	14	2000			
しるうり	ハウス半促成	15	16	3000	5~9月	苗購入の場合	
	トンネル・露地	6	12	2000	6~8月	苗購入の場合	
すいか	ハウス半促成	8	10.5	2000	5~6月		
	トンネル	13	12.5	1500	6~7月		
小玉すいか	トンネル	14	10.5	1500	6~7月		

分類	作物名(作型等)		化学合成農薬 使用回数 (使用成分×回数)	化学肥料使用量 (窒素成分量 kg/10a)	堆肥施用量 (kg/10a)*	収穫期	備考
野菜	メロン	ハウス半促成	15	7	2000	5~6月	
		トンネル	14	8		6~7月	
	温室メロン	夏どり隔離床栽培	11	8.5	1200	3~8月	
		地床栽培	12	6.5	2000		
	いちご	促成	21	18.5	3000		化学合成農薬はランナー切り離し以降の使用回数
	さやいんげん	ハウス半促成	10	12	2000		
		トンネル	10	13.5			
		抑制	4	9.5			
	ばれいしょ	マルチ	7	7.5	1200		
		露地	7	7.5	1200		
	ごぼう	秋冬どり	5	11	1000	6~8月	
		春夏どり	4	11			
	れんこん	普通	2	13.5	-		
		ハウス	2	13.5	-		
	根しょうが	マルチ	7	11	2000		
	葉しょうが	ハウス	3	7.5	1000		
	アスパラガス	半促成(1年目)	16	16	3000		定植年の12/31まで
		半促成(2年目以降)	16	20.5	2000		1栽培期間は1/1~12/31
	たまねぎ	マルチ	8	12	2000		
	葉たまねぎ	トンネル	8	12	2000		
	なす	促成	28	32	3000	9~6月	
		半促成	19	24		2~7月	
			20	30		2~11月	
トンネル		15	23		5~8月		
露地		13	17.5	3000	6~9月		
かぼちゃ	トンネル	6	8	2000			
ピーマン	促成	27	30.5	3000	11~6月		
	半促成	16	18.5		4~7月		
		27	23		4~11月		
ししとうがらし	半促成	13	18.5	3000	5~10月	苗購入の場合	
	露地	8	18.5		6~9月	苗購入の場合	
オクラ		3	11.5	3000			
果樹	日本なし		26	10(清耕栽培)	1500		
				13(草生栽培)			
	温州みかん		13	13.5	1500		
	中・晩生かんきつ類		5	15	1500		
	ゆず		7	8	1500		
	びわ		4	8	1000		
	キーウイフルーツ		3	10	1500		
	いちじく		9	8	1000		
	ぶどう		13	3	1000		
	くり		3	8	1000		
	かき		4	8	1000		
	うめ		6	7	1500		
	ブルーベリー		0	4.5	500		

(注1) 算出根拠

堆肥施用量: 上限ではなく、使用の目安

化学合成農薬使用回数: 「ちばエコ農業」技術部会で定めた延べ成分使用回数の1/2

化学肥料使用量: 「ちばエコ農業」技術部会で定めた窒素施肥量の1/2

(注2) 収穫期が基準月を越えて前後月にまたがる場合は、1ヶ月未満に限り認める

イ 養液栽培「化学合成農薬の使用基準（上限）」

分類	作物名（作型等）		化学合成農薬 使用回数 (使用成分×回数)	収穫期	備考
野菜	養液栽培 トマト	促成	28	10～6月	
		半促成	21	10～2月	
			17	2～6月	
		15	4～7月		
	抑制	15			
	養液栽培 ミニトマト	促成	23	10～6月	
		半促成	15	4～6月	
		抑制	16	8～12月	
	養液栽培 いちご	促成	21		

(注1) 算出根拠

化学合成農薬使用回数:「ちばエコ農業」技術部会で定めた延べ成分使用回数の1/2

ウ 林産物（たけのこ）「化学合成農薬及び化学肥料の使用基準（上限）」

分類	作物名（作型等）	化学合成農薬 使用回数 (使用成分×回数)	化学肥料 使用量 (窒素成分量 kg/10a)	収穫期	備考
	たけのこ (もうそう竹)	0	17	12～5月	竹林の適正な密度をたもつため、親竹を年1回以上、伐竹すること。

(注1) 算出根拠

化学合成農薬使用回数:使用しない。

化学肥料使用量:「ちばエコ農業」技術部会で定めた窒素施肥量の1/2

(2)「ちばエコ農業」化学合成農薬に含めない農薬

農 薬	備 考
除虫菊乳剤及びピレトリン乳剤	除虫菊から抽出したものであって、共力剤としてピペロニルブトキサイドを含まないものに限ること。
なたね油乳剤	
マシン油エアゾル	
マシン油乳剤	
大豆レシチン・マシン油乳剤	
デンブン水和剤	
脂肪酸グリセリド剤	
メタルデヒド粒剤	捕虫器に使用する場合に限ること。
硫黄くん煙剤	
硫黄粉剤	
硫黄・銅水和剤	
水和硫黄剤	
硫黄・大豆レシチン水和剤	
石灰硫黄合剤	
シイタケ菌糸体抽出物液剤	
炭酸水素ナトリウム水溶剤及び重曹	
炭酸水素ナトリウム・銅水和剤	
銅水和剤	
銅粉剤	
硫酸銅	ボルドー剤調製用に限ること。
生石灰	ボルドー剤調製用に限ること。
天敵等生物農薬及び生物農薬製剤	
性フェロモン剤	農作物を害する昆虫のフェロモン作用を有する物質を有効成分とするものに限ること。
クロレラ抽出物液剤	
混合生薬抽出物液剤	
ワックス水和剤	
展着剤	カゼイン又はパラフィンを有効成分とするものに限ること。
二酸化炭素くん蒸剤	保管施設で使用する場合に限ること。
ケイソウ土粉剤	保管施設で使用する場合に限ること。
食酢	

内容についての問合せ先（各農林振興センター振興普及部改良普及課）

千葉農林振興センター	0 4 3 ( 3 0 0 ) 0 9 5 0
東葛飾農林振興センター	0 4 ( 7 1 6 2 ) 6 1 5 1
印旛農林振興センター	0 4 3 ( 4 8 3 ) 1 1 3 0
香取農林振興センター	0 4 7 8 ( 5 4 ) 1 3 3 8
海匝農林振興センター	0 4 7 9 ( 6 2 ) 0 3 3 4
山武農林振興センター	0 4 7 5 ( 5 4 ) 0 2 2 6
長生農林振興センター	0 4 7 5 ( 2 2 ) 1 7 7 1
夷隅農林振興センター	0 4 7 0 ( 8 2 ) 2 2 1 3
安房農林振興センター	0 4 7 0 ( 2 2 ) 8 1 3 2
君津農林振興センター	0 4 3 8 ( 2 3 ) 0 2 9 9

その他の問合せ先

安全農業推進課（制度関係・発行関係）	0 4 3 ( 2 2 3 ) 2 7 7 3
農業改良課（普及関係）	0 4 3 ( 2 2 3 ) 2 9 0 5

著	作	千葉県農林水産部農業改良課 各農林振興センター
編集・発行		千葉県農林水産部安全農業推進課
発行年月		平成19年3月

